

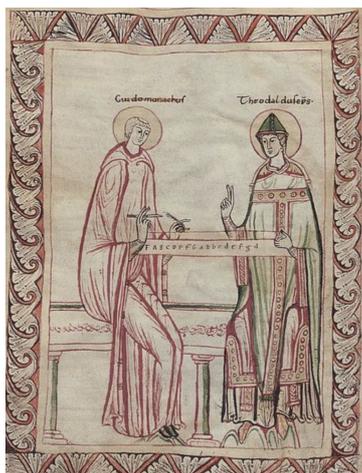


南葵音楽文庫における中世の記譜法に関連する資料、参考文献

Musikalische Schrifttafeln von Johannes Wolf, 1923 M-7/39, M-7/40, M-7/41 (1930)

Carl Parrish, The Notation of Medieval Music, 1957 761.2/PA

南葵音楽文庫
和歌山県立図書館内
和歌山市西高松 1-7-38
tel.073-436-9500
https://www.lib.wakayama-
c.ed.jp/nanki/



ガイド・ダレッツォ

Guido d'Arezzo (992頃～1050年頃)

出生については不明。フェラーラ近郊ポンポーザのベネディクト会修道院に所属した修道士で、少年時代に聖歌歌唱の指導を行う。1023年にアレツォに移り、司教テオダルドゥス(在位1023～36年)の下で歌唱指導者、音楽理論家として活躍。

ウィーン、国立図書館写本51、fol.35

右：司教テオダルドゥス、左：ガイド・ダレッツォ

ガイドの著作

《もう一つの規則 Alia regulae (アンティフォナリウム序文 Prologus in antiphonarium)》1020～25年頃

《マイクログス Micrologus》1026年頃あるいは1032年以降

《韻文による規則 Regulae rhythmicae》1025～27年頃

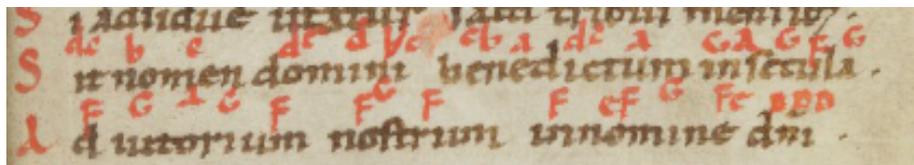
《ミカエルへの書簡 Epistla ad Michaelem

(知らない聖歌を歌うことについての書簡 Epistla de ingito cantu)》1028～29年頃

《韻文による規則 Regulae rhythmicae》抜粋

記譜について [の説明が] 始まる。

私たちは、聖歌を学ぶためには、少なくとも3ヶ月間まじめに使い続けるのであれば、音を文字だけで記すこと以上にやさしい [方法は] ないと考えてきた。



Geneva, Biblioteca Bodmeriana, Cod.lat.77,fol.54r

d b c de d c cb a bc ab a G G G
Sit no- men Do- mi- ni be- ne- dic- tum in se- cu- la

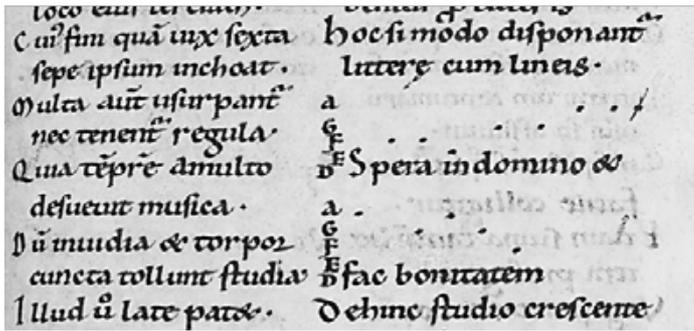
主の御名がたたえられるように、今より、とこしえに (詩編第113編2節)

F G a G F G F F FG E FE D CD D
Ad- iu- to- ri- um nos- trum in no- mi- ne Do- mi- ni

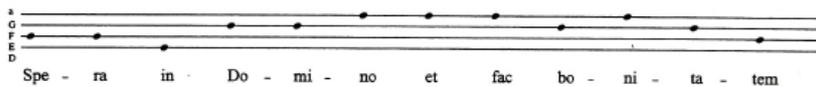
私たちの助けは、主の名にある (詩編第124編8節)

(聖書からの引用は「聖書協会共同訳」2018による。)

一方、ネウマも、文字に比べて場所を取らないので普通に使われている。ネウマは、注意深く使い、次のように線と共に文字がいっしょに書かれるのなら、文字の代わりになる。



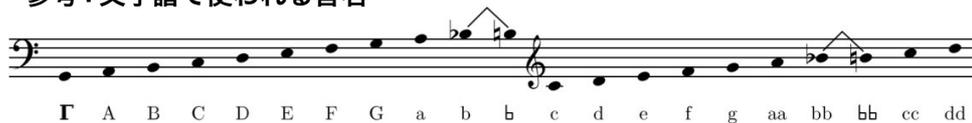
Paris, Bibliothèque Nationale, lat.7211, fol.93r



主に信頼し、善を行え
(詩編第 37 編 3 節)

そして学習が進んだら、2本の線の間に1つの音を置こう。もちろん、様々な状況において様々な置き方が存在することを理性は求めている。

参考：文字譜で使われる音名



《もう一つの規則 Alia regulae (アンティフォナリウム序文 Prologus in antiphonarium)》抜粋

……私は、神の助けによってこのアンティフォナリウム（聖務日課聖歌集）を記譜することにした。それによって知性と熱意のある人なら誰でも容易に聖歌を学ぶことができるようになり、教師からその聖歌の一部をしっかりと学んだ後には、教師がいなくとも残りの部分を確実に理解できるようにするためである。この点について、もし私が嘘を言っていると思うのなら、私たちのところで子供たちがこれを実行しているのを見に来るといい。彼らは、詩編や一般的な書物についても知らないために今でも容赦なく鞭で打たれ、アンティフォナの言葉やその音節をどのように発音するのも分からないにもかかわらず、教師がいなくてもそれ（アンティフォナ）を自分で正しく歌うことができる。

もし、良識と熱意がある人が、いかに注意深く旋律が配置されているかを理解しようと努めるならば、[誰でも] 神の助けによって、これを容易に実践することができるだろう。

それぞれの音は、聖歌において何度繰り返されようと、常に1つの [その音に] 固有の位置に見つかるように配置されている。それらの位置が容易に判別できるようにするために、間隔を狭めて線を引き、ある音はちょうど線の上に、またある音は線と線の間に、つまり [線と線の] 中間に置かれる。

したがって、1つの線の上、あるいは [線と線の] 間に、多くの音があったとしても、それらはすべて同じに響く。そしてさらに、どの線であれ、どの [線と線の] 間であれ、1つの音 [だけ] をもつことが分かるように、特定の線、あるいは [線と線の] 間にモノコルドの [上の音を示す] 文字を書き加え、色をつける。こうすることによって、アンティフォナリウム全体、あるいはそれぞれの聖歌において線や [線と線の] 間がどれほどたくさんあっても、同一の文字、あるいは同一の色がつけられていれば、すべての音が1つの線の上にあるかのように響くことが理解できる。なぜなら、同じ線の上であれば同じ音であり、同じ文字や同じ色が付いていれば同じ線であるので、同じ音であることが分かるからである。…中略…

したがって同じ文字が書かれ、同じ色の線の上に同じように置かれたすべての旋律や音が、同じように響くことは明らかである。